北海道師範塾「教師の道」
塾頭通信
第507号　平成25年3月8日

爆食

２月２日付の北海道新聞に「爆食中国」と題して、中国の食糧輸入が急増し、２０１２年は前年と比べてコメが４倍、小麦・トウモロコシが３倍に膨らんだという記事が掲載されていますが、１３億人を超える中国の巨大な胃袋が、世界中の食糧を飲み込みつつあるという感じがします。

報道によると、中国の２０１２年のコメの輸入量は約２３２万トンで前年の４倍、過去最高を記録したとの事です。その原因について中国農業省は、農家の所得を増やしたり食糧自給を維持したりするためコメの買い取り価格を引き上げた結果、内外価格差が広がり、企業が加工用に安いコメを求めて輸入を増やした事を上げていますが、同時に、中国商務省は、中国の輸入量が世界のコメ貿易の6.2%、自国産の1.6%に留まっており「世界の食糧危機を引き起こすことは、全く根拠がない」と強調しています。

中国の「爆食」による影響は、既に日本にも表れています。例えば、日本の讃岐うどんが将来食べられなくなるかもしれないというニュース（１月２３日付日本経済新聞）も、その一つです。

讃岐うどんの原料となる小麦の多くはオーストラリアから輸入しているのですが、生産農家が日本向けの小麦生産を減らしつつあり、一方では、２０１２年の豪州の中国向け小麦輸出量は約３倍に急増したとの報道もあります。

また、影響があるのは農産物だけではありません。中国では、エビやマグロ、サケなどの消費も急増しており、日本の食卓への影響が懸念されています。

かつて中国は穀物（主にトウモロコシとコメ）の輸出国でしたが、数年前から輸入国になっています。その原因は、いう迄もなく需給のバランスが崩れた事にありあます。

何といっても、１３億人の人々を飢えさせないという事は大変な事です。まして、経済発展に伴い人々の暮らしは豊かになり、それと共に食卓の質と量が改善され、それが食料の消費拡大に繋がる事は必然です。

一方、食糧の増産はそう容易ではありません。

まず、農地の減少があります。工業化が進む中で、１年間に関東の１都５県分に相当するぐらいの農地が失われているともいわれています。

また、農村から都市への人口流失もあり、農村は疲弊しつつあり、それはまた、生産者が減少し消費者が増えるという事を意味しています。

こうして見ると、中国は日本が辿って来た道を歩み始めているといえるでしょう。

この様に、「増えつつある需要に追い付かない供給」という需給バランスの崩壊は、中国の穀物輸入を加速させていますが、今後中国が食糧危機を回避するため世界中の食糧を輸入する事になると、食料価格の暴騰を招き、地球規模での食糧危機が発生する可能性があります。

日本は、世界最大の純食糧輸入国ですから、中国の食糧問題は日本の食糧問題に直結する大問題の筈ですが、その事に対する日本国内の危機感は必ずしも十分とはいえません。

日本は、食糧自給率（カロリーベース）が４割を切っていますから、仮に食糧が輸入出来なくなると、途端に飢餓問題を抱える事になります。

食糧輸入国の日本としては、こうした厳しい環境に置かれている事を前提に、積極的な対策を講じなければなりません。

まずは、飽食日本からの脱皮を目指すべきです。

日本は、世界最大の純食糧輸入国であるにもかかわらず、世界の食糧援助の総量（約６００万トン）を遙かに超える量を多額の処理費用を投じながら捨てるという、世界一の残飯大国でもあるのです。如何に、食べ物を大切に扱うか、つまり食べ残しをしないというだけでも、世界の食糧事情に貢献する事になります。

また、食糧自給率の低さは目を覆うばかりです。一時、中国が日本にレアメタルの輸出を規制した時、産業界は大騒ぎになりましたが、食料の輸入が出来ないとなるとそれどころの騒ぎではありません。食糧自給率の向上に真剣に取り組む必要があります。

こうした国内対策と共に重要なのは、日本の優れた農業技術を以て世界に貢献することではないでしょうか。

例えば、世界最大の食糧消費国である中国等に対する技術的支援、優れた農業従事者の育成などを通して、中国の食糧問題の改善に資する事は、中国だけではなく日本国内の食糧事情の改善にも資する事になる筈です。世界がグローバル化しているという事は、まさにそういう事なのだと思います。（塾頭：吉田　洋一）